

教育目標		心豊かでいきいきと生活する子ども					
重点目標		1 一人一人に応じた環境を構成し、個性を生かす保育をすすめる。 2 友だちと共に伸びよとする仲間づくりを進める。 3 健やかな心と体づくりを進める。 4 家庭・地域社会との連携を図り、地域に開かれた幼稚園づくりに取り組む。					
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
確かな学力の向上	自ら学び自ら考える力の育成	・自ら環境に関わり、主体的に遊び込む力を育成する。 ・子供が遊びたい環境や援助の工夫を行う。園内研究や講師の先生を招聘し、保育の向上に努める。 ・年度当初に学習目標を明確に設定し、保育計画を立案、実践する中で、保育環境や教師の援助のあり方を見直しや改善を行い、子供が主体的に遊び込む保育実践に努める。	・保護者アンケートで「幼稚園で遊びたい遊びはあるか」という項目の評価が80%以上になる。 ・短期案の話し合いの際に、「いきいきと遊び込む姿」を職員同士で共有する。	B	・保護者アンケートで「幼稚園を楽しみにしている」という項目で99%の評価を得ることが出来た。 ・短期案の話し合いでは、「いきいきと遊び込む姿」を話し合い、さらに遊びが深まるよう定期的に計画を話し合いを行った。 ・講師を招聘して園内研究会を行い、研究に視点を当てた環境や教師の援助などの学びを深め、保育に取り入れる事に努めた。	・職員会議や園内研究会などで、子供たちの育ちや課題などについて意見を交換し合い、実施の把握に努める。 ・園児が主体的に考え、行動するための環境の構成、教師の援助などについての共通理解を固め、日々の保育に努めていく。	・複数の遊びができるよう、様々なコーナーを作り、遊びたい環境を工夫する。園児が主体的に考え、行動するための環境の構成、教師の援助などについての共通理解を固め、日々の保育に努めていく。
	直接体験を通して子どもが心を動かす保育の推進	・園の特色でもあるピオトーブなどの園庭の自然物を取り入れた保育を工夫する。 ・月1回ピオトーブ研修会を実施する。 ・様々な自然に興味をもてるよう、草花や樹木、落ち葉、虫など身近な自然物を保育に取り入れ、保育室などの自然物コーナーの充実を図ったり、生き物を飼育したりする機会を増やす。	・2学期より、年長児はピオトーブ研修会を月1回実施する。 ・ピオトーブ研修会を生かして異年齢での交流の機会をもつ。 ・自然を取り入れた教育についての評価を90%以上にする。	A	・コロナ禍で開催できない時期もあったが、地域の方に講師として来ていただき、ピオトーブ研修会を開催することが出来た。 ・前年度の評価・改善案にもあった、「研修で学んだことを年長児に伝える機会」を設けることが出来た。また、保護者に伝える機会も出来た。 ・アンケートで93%の評価を得ることが出来た。	・引き続き、年長児が学んだことを年長児に伝える機会をもつ。園児が主体的に考え、行動するための環境の構成、教師の援助などについての共通理解を固め、日々の保育に努めていく。	・園庭は四季の変化が感じられるように環境整備されているので、月1回の研修だけでなく、日々の保育においても外遊びの際は、虫の様子や木々や草花、取りやめ、気温や風等、ちよつと観察の変化を園児と共に体感できると思う。それを保育室に持ち込んで、子ども達も興味を持って表現したり表現しやすくなること、感じたことを伝える機会になると思う。
豊かな心・健やかな体の育成	子どもの健やかな体づくり	・日々の遊びの中で楽しく運動遊びに取り組む。 ・園と家庭で連携を図りながら、基本的な生活習慣の確立を目指す。 ・保護者の話を基に、健康カレンダーを随時配布し、健やかな体づくりを進める。	・保健の話や月1回実施する。 ・保健活動の評価、運動遊びの評価を80%以上にする。 ・毎月1回の保健だより発行、また随時健康カレンダーを配布する。	A	・保健活動は99%、運動遊びは100%の評価を得ることができた。 ・教師間で連携し、子供の笑顔に即した健康教育を行うことを意識し、保健の話でウズや英語などしながら楽しく取り組むことができた。 ・健康カレンダーに連動して取り組む姿が見られた。 ・クラス活動にも運動遊びを取り入れ、体を動かす遊びが増えてきた。	・今後も教師間で連携し、年齢や発達段階に応じた健康教育を行っていく。 ・好きな遊びだけでなく、クラス活動で運動遊びを取り入れ、家庭にも啓発していくことができるようにする。	・園以外では外遊びがしにくい状況では、園生活での運動が貴重になるので、積極的に運動遊びやリズム遊びを取り入れるのがよいと思う。
	特別支援教育の推進・充実	・個別指導計画を作成し、実践、評価を進めていく。 ・日々の保育、通級指導を通してインクルーシブ教育を進めていく。	・個別の支援を必要とする子どもについての情報交換(にじいろ会議)を月2回実施し、個別指導計画に基づいた指導を実施する。 ・特別支援対象児保護者との懇談会を年間2回実施し、個々の育ちや課題を共通理解し、具体的な支援に努めていく。 ・特別支援教育に視点を当てたアンケート項目の評価を80%以上にする。	A	・専門相談員・相談員、支援対象児に合わせた関わりを学び、課題に向かっている全員が同じ関わりが出来る様に努めた。 ・年間2回支援対象児の保護者に個別指導計画の提示、個人懇談会を実施した。また、保護者の状況に応じて降参観など機会を設け、保護者と話をすることで共通理解し、具体的な支援に努めた。 ・特別支援に焦点を当てた項目では99%の評価を得た。 ・おたより年3回発行し、書籍の紹介など特別支援教育の啓発を行うことに努めた。	・今年度は、対象児をより多く見守り、様々な支援方法を職員間で検討できるようにローテーションを取り入れた。個々の継続した支援を継続するために、職員間で話し合いを深め、全職員で共通理解ができるように努める。	・特別支援教育について、外遊びや話を聞かなくてはならない時など状況に応じて、一人一人違う発達段階をよく理解したうえで、より距離感で支援していたように感じた。
	人権教育の推進・充実	・保護者と連携して、自尊感情の育成に取り組む。 ・植物の栽培を通して、生命の大切さや愛惜愛護(あいきあご)の経験ができるよう保育を進める。 ・人権教材「いたみっこおやくそく」などを必要に応じて活用し、自尊感情の育成に努める。 ・2学期にDVD研修、紙面研修を通して教職員や保護者が学ぶ機会をもつ。	・人権の啓発項目の評価を70%以上とする。 ・自尊感情の育成について、保育の中で工夫していることの情報交換を積極的に行う。	B	・保育の中で一人一人の言葉に耳を傾け、姿を交わす機会を取り組んできた。また、名前的大切さや相手の気持ちを考えたり、名前を呼ぶ機会を設けた。 ・自尊感情の育成については目標を上回る結果ができた。 ・職員や保護者がコロナ禍でも対策を取りながら、多くのことを学ぶ機会を作れるよう考える必要がある。 ・保育者の情報交換を細やかに取り組む必要がある。	・紙面で情報交換を行うこともあったため、各々が時間を問わず、細やかな情報も共有できるように努めていく。	・保護者と共に子どもの成長を認識することで、保護者は子どもにも認められ、自身の子育てを認められ、保護者も園児も自尊感情の向上につながるのではないかとと思う。
教師の教育力の向上	教職員研修の充実・人材の育成	・質の高い教育活動が行えるように個々の教員力を育成する。 ・質の高い教育活動に向けて、幼児理解を基盤とした保育のあり方について話し合ったり、園内研究、共同研究を進めたい。 ・日々の子供の姿を把握し、必要な支援について話し合い、共通理解を図る。 ・教師それぞれが自己目標を設定し、個々の課題に向かって研修会に参加するなどして、専門知識を深めながら資質向上に努める。	・短期指導計画について隔週1回、にじいろ会議を隔週1回実施し、保育計画や、幼児理解に基づいた話し合いを行い、共通理解を図る。 ・園内研究会を年間1回、共同研究園との交流を年間1回以上実施する。	B	・短期指導計画、にじいろ会議については、行事や園庭、出張等の都合により、全員参加での開催が難しく、紙面交換等で子どもの笑顔や成長の状況を確認することが出来た。 ・講師招聘の園内研究会2回、教職員のみ園内研究会1回を実施し、互いの保育について協議し、環境や援助のあり方について学び合う意識を高めた。 ・幼児教育研修会、若手研修会などに積極的に参加し、自己研鑽に努めた。	・園内の研修を行い、主体的に遊び込む子供達の育成に向けて必要な環境の構成や教師の援助の学び、職員間で共通理解を深めていく。また、研修を通して、職員の資質の向上に努める。	・今年度も先生方とのネットワークがより、異年齢での交流も充実していたと思う。 ・年齢が様々な先生方がおられる中、若い先生が育つ環境が大事である。(どの職場でも)コミュニケーションが取りにくい世の中であるが、少しでも話す時間が大切である。
	安全管理	・新型コロナウイルス感染症対策に努め、安心安全な幼稚園生活が過ごせるよう努める。 ・危機管理体制の整備を進める。 ・安全指導を進めていく。 ・園舎内、園庭、遊具等危険箇所がないか点検し、危険箇所の修繕、撤去等を行う。	・「安全、安心に生活している」という項目が80%以上になる。 ・流行疾病についての予防に努め、随時保護者にも直接呼びかけをする。 ・避難訓練を年3回、防災訓練を年1回、必要に応じて安全指導を日々行っていく。 ・園の教育や情報で安全意識が高まった評価が80%以上になる。 ・毎月1回園舎、園庭、遊具等の安全点検を行う。	A	・評価としては99%を得ることができた。 ・避難訓練、防災訓練を適宜行った。また、日々の中で安全指導を行った。教師間で共通理解を図った。 ・安全点検を毎月1回実施し、必要に応じて安全に生活できるよう、関係機関と連携を図った。 ・新型コロナウイルス感染症対策は保護者の協力の下、今年度も行うことができた。	・今後も避難訓練の反省を生かし、安全教育に努めていく。教師の人数と役割を踏まえ、全職員が責任をもって行動できるようにする。 ・新型コロナウイルス感染症対策は引き続き努めていく。	・引き続き、安全に安全点検、避難訓練、防災訓練などを行い、安全管理に努めてほしいと思う。
開かれた・信頼される園づくり	学校園情報積極的な発信	・保護者への情報発信を工夫し、園教育への理解を図る。 ・保育の内容を保護者や地域に発信していく機会をつくり、教育に対する理解を進めていく。 ・ドキュメンテーションや幼稚園だより、クラスだよりなどを定期的に発信していく。	・月1回程度子供達の様子を写真を通して伝える。 ・幼稚園の教育内容や家庭教育の啓発につながるたよりを月1回程度発行する。 ・HPの更新を月3回以上実施する。	B	・ホームページに関しては、3学期は目標の更新が出来なかった。 ・コロナウイルス蔓延防止対策により、参観等が自粛になった時には、園での子供たちの写真を掲示し、園の様子を見てもらうことが出来るように工夫を行った。	・対面での交流が制限されるため、おたよりではおたより丁寧な手紙が書かれていて、保育の意図や園児の様子、先生方との関わりも伝わったと思う。(その分、おたより作成に時間がかかったのではないかと思う。)	
	子育て支援	・預かり保育の充実を図り、子育て支援に努める。 ・「預かり保育」利用者増加に伴い、より安全管理に努め、子供が安心して過ごせるよう環境や活動内容を工夫する。 ・子供の様子や健康状態等教師間の連携を図ると共に、保護者との連携も密にし、子育て支援の充実を図る。 ・まん延防止等措置のため、子育て支援センター主催の「みんなのひろば」を実施し、支援員と連携を図り、未就園児と保護者の様子等について職員間で情報を共有する。	・「保護者が安心して子育てができる」と言う項目の評価を80%以上とする。 ・預かり保育の必要性に応じた対応ができるようになる。 ・子育て支援センター主催の「みんなのひろば」を年間9回実施する。(緊急事態宣言中は中止)	A	・預かり保育の利用者が増え、保護者のニーズに応えるよう努めてきたことで、子育て支援の充実につながっている。評価は98%であった。利用者が増える中、安全面などの課題に関しては引き続き検討が必要である。 ・まん延防止等措置のため、子育て支援センター主催の「みんなのひろば」が中止となったが、開催時には毎回定員を上回る参加者があり、未就園児との自然な交流を図ることができ、保護者が安心して子供と過ごせる場となっていた。	・預かり保育において、利用者が増えることで、子供の安全確保、保護者対応、参観者数の増加などの状況を共通理解し、全職員での協力体制を図る。 ・コロナ禍における行事の縮小化などにより、園の保育参観も制限される中、未就園児とその保護者とのよきに関わり合いを図っていく。	・引き続き、安全に預かり保育を実施できるように、利用者数や年齢に合わせた子育て支援員の配置が必要だと思ふ。
業務組織改善	業務改善	・園務分掌を責任をもって遂行し、業務改善への意識をもつ。 ・園務分掌上の仕事に各職員が責任をもって取り組む。 ・定時退勤日、マイ定時退勤日を園務日程に位置づけ、超過勤務縮減についての意識を高める。	・効率のよい業務についての意識を高め、園務分掌についてそれぞれが責任感をもって、園運営に関わっていく。 ・月1回作業日を設け、全職員で効率よく作業に取り組む。 ・職員会議の時間を決めて行う。 ・月1回の定時退勤日、マイ定時退勤日を実施する。	B	・園務日程に基づき、各担当者が責任をもって検討事項を提案し、計画的に会議や作業に取り組む。 ・必要に応じて作業の時間を決めて効率よく作業を行ってきたが、行事の前日準備に時間がかかることが多かった。 ・保育環境設定、作業、事務仕事、研修、コロナ対策等仕事量が多く、超過勤務軽減については引き続き課題である。	・園務分掌担当者が中心となり、事前に提案資料を配布するなど効率よく職員会議を進め、共通理解を図る。 ・園務日程を作業日を位置づけ、計画的に行う。 ・引き続き定時退勤日の徹底、年休取得を図る。	・職員数が少ない中、協力し合って業務を行っているが、保育環境設定、職員会議、事務処理、作業、またコロナ対策等、膨大な仕事量を抱えているが、業務を精選して行っていくが課題である。

学校関係者評価総括
 コロナ禍により、幼稚園訪問の機会が少ないため、評価ができたが、先生方の工夫がよく感じられる。しかし、行事を参観させていただいた時に、保育者自身が得意なものに挑戦しようとする意欲に欠けているように思う。来年度はこの点についての保育者も取り組んでみてはどうか。

次年度に向けた重点的な改善点
 限られた保育時間の中で、園児が自分の好きなことや得意なことを見つけた時間、行事に沿って皆で取り組んだりチャレンジしたりする時間、生活習慣など健やかに安全に過ごすためにしなければならないことをする時間など、日々多様な経験を重ねながら、いきいきと生活し、成長して欲しいと思う。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った